

これからの時代を見据えた 白百合女子大学における教育への展望 ～ Society5.0を生きるポーリニアン の育成を目指して～

海老原 晴 香
大 貫 麻 美

はじめに

本稿は、これからの時代において求められる教育、現状を踏まえた白百合女子大学（以下、「本学」とする）における教養教育の在り方の検討をするための基礎的研究である。まず、“VUCA world”とも称されるこれからの時代において教育において期待される力についての国際的な動向の整理を行った。その上で、特に、Society5.0と言われるこれからの日本の動向を概観することとした。そして、こうした流れの中において、本学が今後どのような点に留意して教育を行っていくべきかを、設立母体であるシャルトル聖パウロ修道女会（Sœurs de Saint Paul de Chartres / Sisters of Saint Paul of Chartres、以下「SPC」とする）の創立精神や、設立母体を同じくする教育機関による第15回国際SPC教育者大会（フィリピンにて実施）の実施視察により得た知見をふまえて検討した。これらの検討を総括して、SPCの創立精神とこれからの時代に求められる教育の整合性を確認した上で、SPCの創立精神に関わり、理解し、体現しながら社会に示すことのできる者、即ち「ポーリニアン」を育成する白百合女子大学の教育の在り方を論じることを試みた。

1. これからの時代と求められる教育（国際的な動向）

人類史を振り返ると、一般市民の生活をも含む社会構造を劇的に変化させた産業革命が複数回、記録されている。現代は、まさに新しい産業革命による劇的变化が起きている、その直中にあるといえる。情報社会を超えた新しい時代は、一方で、今までに通じていた論理が通じなくなるという不安をも内包している。こうした観点から次の時代を“VUCA world”とし、経済・産業・教育等、多様な場面で各々の在り方を再考する動きが見られている。たとえば、Bennett & Lemoine（2014）は、VUCAが示す4つの特性（volatility: 変動性, uncertainty: 不確実性, complexity: 複雑性, ambiguity: 曖昧性）について、その特性や事例を説明し、ビジネス的視点から対応策を論じている¹。

VUCAの時代にあって一般市民レベルにおいては、教育を通じてどのような資質・能力を修得していくことが要請されるのであろうか。UNESCOは、2005年から2014年までの10年間を「持続可能な開発のための教育の10年（Decade of Education for Sustainable Development; DESD）」と定め、これからの時代における諸課題の一つを、「自らの問題として捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）」ことができる人の育成、とした²。また、2013年の第37回ユネスコ総会では、DESDの後継に当たる「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム（Global Action Programme on Education for Sustainable Development; GAP on ESD）」が承認され、その取組は日本国内においても計画・実行されてきている³。

UNESCOはGAPを、2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ（the 2030 Agenda for Sustainable Development）」に記載の2016年から2030年までの国際目標である「持続可能な開発目標（SDGs）」の17の目標のうち、4教育（Education）に包

掲される目標4.7「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」⁴に対応するものと位置付けている⁵。「持続可能な開発のための2030アジェンダ」は、「Leaving no one behind」を理念として、社会的弱者をも含め、誰も置き去らないという観点に立って作られた国際的な目標である⁶。

2030年を見据えたこうした社会の構成者の育成に際して、どのような学びが育まれるべきなのであろうか。OECD (2018) は、学習者が自分たち、他者、地球のために「ウェルビーイングと持続可能性 (well-being and sustainability)」の構築をできると感じられる教育の必要性を述べている。また、そこで修得されるべき「変革を起こす力のあるコンピテンシー (transformative competencies)」として、「新たな価値を創造する力(creating new value)」、「対立やジレンマを克服する力 (reconciling tensions and dilemmas)」、「責任ある行動をとる力 (taking responsibility)」の3つを詳述している⁷。

こうした動向をふまえると、VUCAの時代において生じる諸課題を、自分事として捉え、変革を起こしていくことのできる人、またその変革を自らが起こせるという自己効力感をもった人の育成が期待されている、ということができる。

2. 我が国の目指すべき未来社会とその特性

国際的な動向とともに、日本においても新しい時代とそれに即した教育の在り方が問われるようになってきている。内閣府⁸は第5期科学技術基本計画⁹において、過去に見られたそれぞれの社会の特性をSociety1.0（狩猟社会）、Society2.0（農耕社会）、Society3.0（工業社会）、Society4.0（情

報社会)とした上で、新しい時代をSociety5.0として、「サイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会(Society)」として示している。Society4.0においては、サイバー空間に人がアクセスして情報を入手したり集積・分析したりすることを通して、それらをフィジカル空間に活用していくことが主眼となっていたのに対し、Society5.0においては、多様なセンサーやInternet of Things (IoT) から、あらゆる情報がサイバー空間上に集積され、そうしたビッグデータを人工知能(AI)が解析し、新たな価値が創造されていくといった情景が示されている。我が国は、課題先進国として、あらゆる産業や社会生活にIoT等の新しい技術を取り入れ、経済発展と社会的課題の解決を両立していくことを目指して、取り組みを進めていくことが想定されている。

Kimura (2019) は、日本の職人技や現場主義等は、第二次世界大戦後の高度経済成長においては成功したが、VUCAの時代においては適用が難しく新たなビジネスモデルを構築していくことが期待されることを示し、日立製作所における取り組みを事例として紹介している¹⁰。栗田(2018)は、日立製作所の「ビジョンデザイン」¹¹やトヨタ自動車未来プロジェクト室の「未来年表」を紹介しながら、両者の取り組みに共通する点を以下の①から④で示し、VUCAの時代だからこそ両者の事例におけるような未来洞察が必要であると述べている¹²。

- ①未来を自ら創造するという強い意思
(受け売り／思考停止からの脱却)
- ②不確実な変化の兆しの内部化
(無関係と切り捨てていた情報への感度向上)
- ③様々なステイクホルダーとの対話の為のたたき台の提示
(創発性／参加性の重視)

④未来に関する継続的かつ組織的な洞察

(属人的／イベント的な取り組みからの脱却)

栗田の述べるこれら4つの特徴と、先に述べた国際的な動向として育成が期待されている力とを比較して考えると、①は生じる諸課題を自分事として捉え、そこに変革を起こせるという自己効力感を持つということにつながると考えられる。また、②は「新たな価値を創造する力」、③は「対話やジレンマを克服する力」につながると考えられる。④はKimura(2019)の述べる職人技や現場主義からの脱却と合致する内容であり、一見すると個人の判断や行動への責任が見いだされにくくなっている。しかし、OECD(2018)における「責任ある行動をとる力」とは、「新しいこと、変革、多様性や曖昧さに対応していく」こと、そして「個々人が自分たちのことを考えると同時に他者と協働することを想定」しており、こうした協働の場において「過去の経験や社会的・個人的目標、これまで教えられ言われてきたこと、何が正しく何が間違っているかといったことに照らして」自らの判断や行動を振り返りながら、次の行動を決定し、またその行為を評価して以後の見通しに活かしていくことのできる力を含意している。以上をふまえると、栗田の述べる④は「責任ある行動をとる力」に相当すると考えることができよう。

日本における喫緊の課題のうち人口変動とそれに伴い生じうる課題について、尾崎(2019)は第24回日本在宅ケア学会学術集会の学術集会長講演で「人口の高齢化に伴い社会保障費が急増する一方で、若年者層の減少によって国家の税収は減少します。さらに、多死社会の到来によって日本の人口は急速に減少し、行政サービス機能を失う自治体が多く発生し、人口減少地域での犯罪や貧困が顕著になると言われています」としている。その上で、「病や障害があっても自分らしく生きたいという人々の願いや希望を実現するために、先駆者から受け継がれたパイオニア・スピリットで

新しい価値を創り出していくこと」が求められるとしている¹³。同学術集会においては、こうした未来洞察に即しつつ、地域包括ケアの重要性が示されており、平山・松浦（2019）はその実現のために「保健、医療、介護、福祉の連携、多職種の連携の取り組みを強化しつつある日本国内では現在、多職種連携が現場で急速に取り組まれている」ことなどを考察している¹⁴。

Society5.0の時代においては、AIによる解析や提案が主導するように捉えられがちであるが、日本在宅ケア学会における議論に見られるように、どう生きるのかという問いに正対し答えるのはAIでなく人であり、個々人が多様な他者と共にどのような社会を構成するのかについて考え、合意形成していくことが肝要であると言える。

一方で、Yano（2019）は国際的には常識である教育の目的としてのウェルビーイングやその理念が、日本においては必ずしも周知されていないことなどへの懸念を示している¹⁵。この言葉の理解には、SDGsが設定された背景やその理念についての理解が重要である。朝日新聞社は、東京・神奈川に居住し、調査会社のウェブアンケートに登録している15歳から69歳を対象として行った5回目のアンケート調査（2019年8月1日と2日に実施）において、「SDGsという言葉聞いたことがあるか」という質問に対する「ある」との回答が27%であったこと、2017年7月の調査開始以降初めて20%を超えたことを報告している¹⁶。年を経るにつれ徐々にSDGsに関する認知は高まってきていると言えるが、未だ十分な認知度とはいえない。

文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室は、OECD Education 2030プロジェクトの仮訳において、ウェルビーイングの記載に関する註釈として、教育基本法第2条の「教育の目標」に触れ、「豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと」（同条第1項）や「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」（同条第4項）等がウェルビーイングの考え方に合致するものであることを記し

ている。一方、堀内（2018）が述べるように¹⁷、日本には「『他者』を排除し、『皆と同じ』に価値を置く社会」が見受けられ、「『違い』を認識」し、「多様性を包摂する社会」の構築が急務とされるといった課題がある。SDGsの理念を正しく認識し、多様な他者を誰も置き去ることなく、対立やジレンマを克服し、新たな価値の創造に責任をもって取り組むことのできる道徳心や態度を若者の内に育むことは、教育に携わる者が継続して取り組んでいくべき課題であると言えよう。また、日本においては長らく大学受験等の進路選択に際して理系・文系という区分がなされてきたが、地域包括ケアの共同体構築に見られるように、複数の異職種との連携などが求められる今後においては、こうした区分を超えて、他者を理解し協働していく姿勢の涵養が必要とされる。

近年の学習指導要領改訂において、初等中等教育段階で育成を目指す資質・能力は、「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く『知識・技能』の習得）」、「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に活かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養）」という3つの柱に整理されてきた¹⁸。ウェルビーイングについての学びは、3つめの視点と重なるところが大きい。自らにとっただけでなく、他者にとってもよりよい生とは何か、よりよい生を送るために社会・世界とどのように関わっていくべきなのかについて、既存の教科の枠を超えて学んでいくことの意味が大きく問われていると言えよう。

3. これからの教育と白百合女子大学のミッション

中央教育審議会（2018）が示した「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」には、高等学校までの教育における上述の3つの柱と

の接続が意識されたうえで、これからの高等教育において「高等教育機関自らが、『建学の精神』や『ミッション』、教育研究についての説明責任を果たしていくこと、さらには『強み』と『特色』を社会に分かりやすく発信していくことが重要である」と述べられている¹⁹。ここからは、本学のミッションを今一度概観し、あらためて強みと特色を確認したうえで、現状に照らして今後本学で要請される教育がどのようなものであるかを検討する機会としたい。

3-1 シャルトル聖パウロ修道女会と白百合女子大学の建学の精神

本学は、設立母体であるシャルトル聖パウロ修道女会（SPC）の創立精神を教育活動の源流とし、白百合女子専門学校・白百合短期大学等を経て1965年4月に開学した4年制大学である。SPCの創立者ルイ・ショーヴェ神父（Father Louis Chauvet, 1664-1710）は、1696年、主任司祭としての初任地であったフランス、シャルトル近郊の貧しい村ルヴェヴィル・ラ・シュナール（Levesville-la-Chenard）に、村の歴史上最初の小さな教室を創設し、キリスト教精神に根差した教育活動を開始したが、その目的は「単に貧しい娘たちが読み書きを学び、手に職をつけ、生きる手段を得ることではなかった」²⁰。ショーヴェ神父による教育の眼目は、若い女性たちが「学んだものを用いて貧しい人々や苦しむ人々と直接に関わり合う中で本物の自由を知る」²¹ことを目的としていた点にあった。こうした思いはまず、神父から直接手ほどきを受けた「最初の学校の娘たち」²²に伝えられ、さらにはそこから現代に連なるSPCの活動実践全て²³を支える根本精神として受け継がれていくこととなった。着目すべきこととして、女性たちは、たとえば他の修道会の手がまわらないところ、行き届かない地、手を必要としているにもかかわらず見過ごされている場で働ける者となるべく教育されたことも伝えられており²⁴、そこにおのずと他の修道会とは異なった、

必ずしも目立つ場ばかりではない地での活動、という特色が現出し、歴史として刻まれてゆくこととなる。250年以上の時を経て発足の地フランスから遠く離れた日本で産声をあげた本学においても、SPCの働きを支えてきた精神を礎に、またその精神が次世代へと継承されるべく、教育が実践されるよう目指されてきたことは言うまでもない。

本学の建学の精神²⁵は、学校法人白百合学園と姉妹法人に属する全ての学校教育機関と同様、SPCの創立の精神に則っている。すなわち、知性を磨き、技術を修得することは、自らの生きる手段を得るためのみにあらず、それら「学んだものを用いて」、必ずしも光が当てられるとも限らない要請の場を探し出し、奉仕し、実際に他者と関わり合いながら働くことを自らの使命と認識できるようになったうえで、「他者のために、社会のために、何ができるのかを探求しつづける女性」²⁶へと成長してゆくことに最たる目的がある。この点、前項までで確認した国際的な教育動向及び日本での教育議論において育成を期待されている資質と、目指すところは合致していると言えるだろう。ただし、SPC創立の精神が本学固有の特色として全教職員と本学で学ぶ全学生に認識され、共有され、理解を得ているかについては、今後の総括的研究での明晰化が期待されるところである。

2017年10月17日にSPC総長Mère Maria Goretti LEEとSPC教育担当顧問Sœur Brigitte SAVAGEが本学を来訪された際、SPCによる設立の教育機関がショーヴェ神父の創立精神を適切に実践しているか、所属のSPC会員及び教職員一同が日々検証してゆくことの重要性に言及されたと記録されている²⁷。キャンパス内常住常勤のSPC会員が不在となった今、本学で学ぶ学生にはもちろん、社会に向けても、受け手に伝わる方策を工夫しながら、建学の精神と固有のメッセージを示していく責務が全教職員に託されているのである。

3-2 シャルトル聖パウロ修道女会フィリピン支部での取組を見学して

本稿執筆者（海老原・大貫）は、2019年5月16日から18日にかけてフィリピンの首都マニラにて開催された第15回国際SPC教育者大会（15th International SPC Educators' Congress）への参加機会をいただいた。こうした国際会議がSPCフィリピン支部主導で行われるに至った経緯や、今回の大会がどのようなテーマと問題意識のもとで開催されたかの詳細については別稿を期したい²⁸が、本渡航中に来訪がなかったSPC教育機関で目にした取組は本稿テーマに照らしても示唆に富むものであったため、ここで報告の形式をもって言及したい。

今回の大会はマニラ首都圏に属するPasig市にて、幼小中高を擁するSPC設立母体の女子校セント・ポール・カレッジ・パシッグ校（St. Paul College Pasig、以下「SPCP」）を会場として開催された。大会プログラムとあわせて参加者に配布されたメモパッドの枠外には、「ポーリニアン構成者の確言（Paulinian formators' affirmation）」として次のような言葉が印字されていた（写真①も参照）。

私はイエス＝キリストの弟子である

I am a disciple of Jesus Christ

私はポーリニアンの卓越性の手本である

I am a Paulinian model of excellence

私はポーリニアンの共同体を築く者である

I am a Paulinian community builder

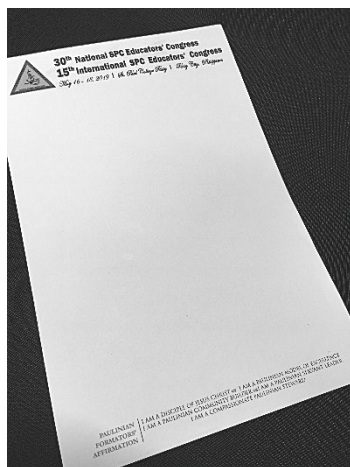
私はポーリニアンの仕える指導者である

I am a Paulinian servant leader

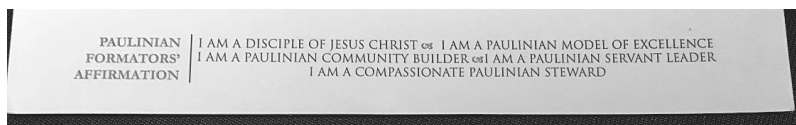
私は思いやりあるポーリニアン世話人である

I am a compassionate Paulinian steward

写真①



写真①枠外拡大



「ポーリニアン (Paulinian)」とは、SPCの創立精神に関わり、理解し、体現しながら社会に示すことのできる者のことで、端的にはSPC設立教育機関で教育を受ける在学生と卒業生の理想像を指すが、広義には、学園運営に関わって次世代の「ポーリニアン」育成のため教育活動に従事する教職員や、学園に子どもたちを通わせる保護者も含まれる。この確言は、後ほど示す各教室掲示の文言（写真②も参照）と比較すると教職員側のコンピテンシーを明らかにするもので、「model」「builder」「leader」と並んで一見対概念とも思われる「disciple」「servant」「steward」の表現が見られ、「ポーリニアン」教育に携わっていることへの誇りを胸に、一層他者（直接的にはSPC教育機関の幼児児童生徒学生たち）に思いやりをもっ

て仕えつつ社会の要請に応えるべく導くことができる者となることへの自覚を促す、シンプルながらも大会参加者の心に訴えるには十分に効果的なものとなっていた。

如上の教職員側のコンピテンシーに呼応する学習者側に求められるコンピテンシーを示すものとして、SPCPの各教室正面上方には、次のような掲示がなされていた（写真②）。

写真②



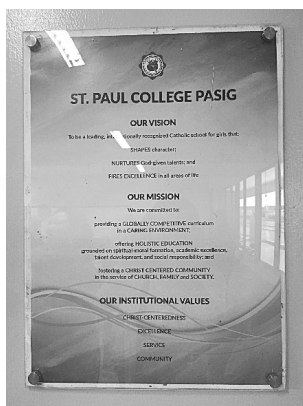
ポーリニアンは、学業に優れ、道徳的に正しく、そして社会に対して責任感を持つ。

A Paulinian is Academically Excellent, Morally Upright and Socially Responsible.

これは、SPCPにおける教育の主眼（MAIN THRUSTS）及び学園全体での学習者における最終成果（SCHOOLWIDE LEARNER OUTCOMES）を表現するものとして、学園ウェブサイトの「ヴィジョン—ミッション」ページに詳細が記されている文言²⁹である。サイトの詳述からは、パシッグ校卒業生にとどまらず、「ポーリニアンである卒業生とは」どのような人間となることを目標とするのか、その理念を共有しやすいようかみ砕いた説明が工夫されていることがわかる。また、これらはOECD（2018）が示している「変革を起こす力のあるコンピテンシー」にも通じるものであ

り、フィリピン固有の状況だけでなく日本における教育現場や社会にも訴える内容であると言える。各教室だけでなく学内のあらゆる場にこうした掲示がされていた（写真③④）ことから、学園のミッションや「ポーリニアン」としてのあり方といったテーマが日常的に言及され、教職員と幼児児童生徒及びその保護者との間でも共有が試みられ、各々の内で「ポーリニアン」の理解や自覚が促される環境が醸成されていることがうかがわれた。

写真③



写真④



SPCPでは、こうしたミッション共有の努力の末、ミッション内容の具体的な結実として2007年にFather Louis Chauvet Foundation School（以下、「FLCF」）という付属教育施設を発足させ、2018年春には初めての高校卒業生25名を送り出すに至った³⁰。FLCFでは、学納金納付に代える形で保護者に学内での労働を提供することで、家庭の経済的事由により通学が困難となっている子どもを受け入れ、教育を実施するスタイルをとっている³¹。FLCF運営のための原資はSPCPに子どもを通わせる保護者からの

寄付でまかなわれ、学園行事やワークショップなどでの両校の交流も盛んに実施されている。FLCFで学ぶ子どもたちや労働力を提供する保護者も含め、この取組を支える人々³²全ての働きと意識の内に、「ポーリニアン」の理想と実践を尊び、社会へ広めていこうとするひたむきな思いがうかがえた。ミッション遂行の担い手として、各々の持ち場でいかに力強くメッセージを発信していくか、を日常の具体的な働きの中で協働しつつ模索する彼らの姿勢が印象的であった。

3-3 白百合女子大学における教育のこれから

本学での教育活動において今後一層理解が深められ共有されるべきは、大学で実施されるあらゆる活動——教養科目及び専門科目の学び、学園行事、学生会活動やクラブ・サークル活動に至るまで——に通底して建学の精神すなわちSPC創立の精神があり、例えば専門科目についても「ポーリニアン」たる生き方を全うするためにこそ各々の学びを徹底して修めることの意義がある、ということが、学生及び保護者、そして社会にも伝わるようますます工夫していかなければならない、という点である。本学のミッションを直接扱うカトリック教育センターや基礎教育センターでの教養科目だけでなく、全ての専門科目の授業においても、これから一層こうした意識が共有され、学習者に学びとられることが肝要である。そのために、専門・学部学科・部署を横断しての授業開発や新たな協働の試みも必要となるだろう。こうした取組を徹底し具体化してゆくことが、本稿1及び2で概観した教育動向に応えようとしてゆく姿勢の証左ともなる。

備考：本論文は執筆者間による協議を経て共同執筆している。責任執筆部分は、1・2：大貫麻美、3：海老原晴香である。なお、本論文の一部は、科研費（課題番号16K12769, 研究代表：大貫麻美）の助成を受けている。

- 1 Nathan Bennett and G. James Lemoine (2014) Crisis Management: What VUCA Really Means for You, Harvard Business Review, the January-February 2014 issue, <https://hbr.org/2014/01/what-vuca-really-means-for-you>.
- 2 日本ユネスコ国内委員会 (2013) ESD (Education for Sustainable Development) , <http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>.
- 3 持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議 (2016) 我が国における「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するグローバル・アクション・プログラム」実施計画 (ESD国内実施計画) , <http://www.env.go.jp/press/files/jp/29478.pdf> など.
- 4 United Nations (2015) Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development, 我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ (外務省 仮訳) , p. 17, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/000101402.pdf>.
- 5 UNESCO: Global Action Programme on Education for Sustainable Development, <https://en.unesco.org/gap>.
- 6 United Nati 持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議 (2016) 我が国における「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するグローバル・アクション・プログラム」実施計画 (ESD国内実施計画) , <http://www.env.go.jp/press/files/jp/29478.pdf> など.ons (2016) The Sustainable Development Goals Report 2016, <https://unstats.un.org/sdgs/report/2016/leaving-no-one-behind>.
- 7 OECD (2018) The Future of Education and Skills; Education 2030 the Future We Want, 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室, 教育とスキルの未来：Education 2030 【仮訳 (案)】 , http://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf.
- 8 内閣府：Society 5.0, https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html (最終閲覧 2019.08.23) .
- 9 第5期科学技術基本計画<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index5.html> .
- 10 Tsuyoshi Kimura (2019) The Implementation Challenge in Strategic Management: Hitachi' s Transformation & Post-Transformation Experience, Journal of Strategic Management Studies, Vol. 10, No. 2, pp. 103-107.
- 11 日立製作所：ビジョンデザインとは, http://www.hitachi.co.jp/rd/portal/highlight/vision_design/index.html .
- 12 栗田恵吾 (2018) オピニオン：“VUCAの時代” のビジョンデザインと未来年表, 日本総研 経営コラム, 2018.09.14, <https://www.jri.co.jp/page.jsp?id=33462> .
- 13 尾崎章子 (2019) 学術集会長講演 いのちと暮らしを支える在宅ケアのバイオニア・スピリット, 第24回日本在宅ケア学会学術集会抄録集, p. 32.
- 14 平山香代子・松浦眞理子 (2019) , 地域における多職種連携の状態を測定する尺度の

探索,第24回日本在宅ケア学会学術集会抄録集, p. 32.

- 15 Hiroshi Yano (2019) Missing Rhetoric of Education in Japan: Dialogue on Rethinking Education and Teacher Education of Japan, World Education Research Association 2019: Focal Meeting in Tokyo.
- 16 朝日新聞 (2019) SDGs認知度調査 第5回報告, https://miraimedia.asahi.com/sdgs_survey05/.
- 17 堀内光子 (2018) 基調講演 人々の大移動の時代に、包摂、持続可能、公正な社会を実現できるのか, 日本カトリック教育学会第42回全国大会抄録集, p. 11.
- 18 中央教育審議会 (2016) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申), pp. 28-30, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf.
- 19 中央教育審議会 (2018) 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申), p. 11, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/12/20/1411360_1_1_1.pdf.
- 20 50周年記念誌編集委員会 (2015) 白百合女子大学創立50周年記念誌, p. 94.
- 21 同上参照。ショーヴェ神父によるこうした教育ヴィジョンは、自身が育まれてきた学びの環境や時代背景から生み出されたものであった。「ルヴェヴィルに赴任するやいなや学校設立を実現するために村人の説得に奔走し、ダビド師によって掘り起こされた村役場等の記録によれば病人や貧しい人々の世話に奔走する毎日だったというショーヴェ師の姿を考えると、ショーヴェ師にとってそれまでの学びは学問のための学びというよりも、その学びを人々に対する『愛に変えていく学び』——本学クララ・ホールに掲げられている初代学長メル・クララ三島の言葉にあるように——であったといえよう。」佐々木裕子 (2017, 6, 30) 白百合の源泉をたどる 3.アヴィニオン Avignon ——「宣教司祭」としての一步, クロニカ CHRONICA 白百合女子大学キリスト教文化研究所所報 No. 37, p. 7.
- 22 白百合女子大学創立50周年記念制作ウェブページ『白百合学園のルーツ シャトル聖パウロ修道女会の歴史と精神』, 3. 修道会-2) 共同創立者, <https://www.shirayuri.ac.jp/spc/congregation2.html> を参照。
- 23 SPCの活動は、「宣教」「福祉」「教育」の3つの領域にわたる。日本での各領域における活動概要については、シャトル聖パウロ修道女会日本支部のホームページにおける「活動紹介」, <http://spc-japan.org/propagation.php>, <http://spc-japan.org/welfare.php>, <http://spc-japan.org/education.php> を参照。
- 24 「素朴を愛し、自分たちが重要な人間、必要な存在であるなどと考えることなく、自分たちの会が創立されたのは、教会の他の重要な修道会が子どもの教育や病人の看護に手がまわらないところを、その司教区において補うためであること、そして自分たちはいわばそれらの修道会のできないところを引き受けるものにすぎないということを決して忘れてはなりません。」会則草案第1章, シャトル聖パウロ修道女会

日本支部のホームページにおける「霊性」<http://spc-japan.org/soul.php> を参照。また、『50周年記念誌』,p. 96、『白百合学園のルーツ』,3-5) 会 の 精 神, <https://www.shirayuri.ac.jp/spc/congregation5.html> を参照。

- 25 「白百合女子大学における教育の基本理念はキリスト教、特にカトリシズムの世界観による人格形成にある。本学の母体であるシャルトル聖パウロ修道女会の創立の精神に則り、知性と感性との調和のとれた女性の育成をめざす。」白百合女子大学ホームページ「建学の精神・教育目標」, <https://www.shirayuri.ac.jp/guide/spirit/index.html> を参照。
- 26 同上参照。
- 27 一人ひとりが自らの意識と実践を検証するための手立てとして、以下のような3つの問いが具体的に提示された：「1. 各施設で提供されているプログラムや活動、奉仕などが、キリストとその福音の価値観を伝える証しとなっているかどうか、2. そこで行われている教育や人々へのケア、司牧活動をできる限り質の良いものとするために、与えられている様々な資源や能力をどのように統合して、今、行われている実践を改善することができるかを考えているかどうか、3. それを担う人々の養成のため、また活動計画を立てそれを実践していくために、そこで働く人々がお互いに気軽に出会え、知り合える機会を増やし、始めたことを進め発展させていくよう励まし導いているかどうか」佐々木裕子 (2017, 12, 20) 総長メール・マリア・グレッティをお迎えして——ショウヴェエ師の精神を現代に生きるということ——, クロニカ CHRONICA 白百合女子大学キリスト教文化研究所所報 No. 38, p. 8。
- 28 現在に至る20年余りのSPCフィリピン支部における修道会管区刷新と教育改革の報告として、佐々木裕子 (2019, 6, 30) フィリピンにおける修道会の刷新プログラムの歩み (1) ——シャルトル聖パウロ修道女会フィリピン管区との20年から、クロニカ CHRONICA 白百合女子大学キリスト教文化研究所所報 No.41, pp.2-4を参照。末尾には、「その（執筆者注：2019年第15回国際SPC教育者大会の）内容と大会の視点についてはそこに至るまでの経緯と共に次号で紹介させて頂くことにする」と記されている。
- 29 セント・ポール・カレッジ・パシフィック校ホームページ, “About”, “Vision-Mission”, <https://www.spcpasig.edu.ph/vision-mission/> を参照。「学業に優れ」ていることの内実として、「問題解決のため創造的かつ批判的な考察を示し、広い視野に立った決断をし、質の高い働きを開発し生産すること」「情報・メディア・テクノロジーを、合理的に、倫理にかなう形で、責任をわきまえて駆使すること」「リーダーシップを発揮すると同時に、アイデア交換のため、新たな理解を創造するため、また展望を探るため他者と協働し、実生活の様々な状況に知識を応用すること」「学びへの積極的な姿勢を表し、生涯を通じて学び続けることに励むこと」を、「道徳的に正しく」あることの内実として、「自己と他者との関わりにおいて、敬意と誠実さを重んじること」「ありのままのいのちを尊び、全被造物の尊厳を支持すること」「共同体及び社会において、キリスト教カトリックの価値観を示す良いロールモデルとなること」を、そして「社会に対して責任感を持つ」ことの内実として、「国の伝統に誇りを持ち、国家建設に意欲的に参加できること」「貧困の軽減、環境保全、そし

て平和の構築のため進んで活動し、応えること」「個性と文化的相違を認識し、尊ぶこと」「地域社会及びグローバル社会のメンバーとして、生産的に働けると示すこと」を挙げている。

- 30 Father Louis Chauvet Foundation School (June 2017-March 2018) The Official Student Publication of Fr. Louis Chauvet Foundation The Paulight "Igniting the Flame, on Behalf of its Name" , Vol. III, Issue No. 1, p. 15. FLCFでは日本で言うところの小学6年生 (Grade 6) 修了時と高校3年生 (Grade 12) 修了時に卒業セレモニーを行っている。2018年春で、小学生の卒業セレモニーは6回目を数えた。
- 31 保護者による労働の具体例としては、清掃、ガーデニング、施設修理、食事作りなどがあり、本稿執筆者が訪問した際も保護者による手料理がふるまわれた。
- 32 取組を支える人—取組によって支えられる人、との厳然たる区別は、理念上FLCFの取組でなされておらず、初期キリスト教時代から大切にされてきた人間を神の像とするキリスト教的人間理解に照らしても異質なものである。キリスト教的な神の像たる人間理解については、経済的・社会的・身体的困窮者に関する教父説教を用いて考察した拙稿 (2019, 6, 30) 神にかたどられた人間——ニュッサのグレゴリオスの人間理解, クロニカ CHRONICA 白百合女子大学キリスト教文化研究所所報 No. 41, pp. 4-7 を参照。